

日本語における時制の問題

—ロドリゲス著『日本大文典』を見て—

稲川 順一

そもそも日本語に於いて「時制」はどれほどの意義・重要性を持つのであろうか。西欧語と比較して、はっきりと過去・現在・未来を表わす指標となる語及びその觀念が、貧弱であることは良く知られた現象である。

こゝでロドリゲス著『日本大文典』（土井忠生氏訳註）を参照すると、彼は時制表現のとはしい日本語の中で、口語と文語とに分けて、自国語ポルトガル語の文法に擬して（と思われる）、可能な限りの分類を行なっている。

例えば『存在動詞 DEGOZARV は次のように活用する』（第一巻「一般の話しことばに用ゐる存在動詞の活用」において）の中で次の様に述べている。（「でござる」は助辞、「で」を伴った複合動詞としている。）

○直接法の現在（略）でござる

○不完全過去

でござる
でござった

○完全過去

でござった
でござった、又は、

○大過去

○未来

でござってござった
でござらう

でござらうず
でござらうずる

○完全未来、又は確実未来

はや でござらうず

（以下略）

右の例の場合

(1) 直接法現在と不完全過去に同じ語形「でござる」があること。つまり一つの語形で二つの時制をかねているだけでなく、

(2) 不完全過去・完全過去・大過去の三つの時制を一つの語形「でござった」で兼ねていること、

(3) 大過去の「でござってござった」はどちらかというとう、不自然な言い方であること、

(4) 未来の「でござらうず（る）」「の」「ず（る）」は強意

の助動詞であること、

- (5) 完全未来・確実未来の「はや でござらうず」の場合、「はや」は副詞であり時制としての本来の形とは認めにくいこと、

等々のことを考えてみるに、時制としてはっきりとした名称の割に、動詞そのものゝ形は変化に乏しい。しかも総てが動詞の活用変化によるというより、この場合、附属語・副詞によって意味を付加されて、ポルトガル語文法による分類の用例として成り立っている。言い換えると、ポルトガル語の文法に則した日本語を記述しようとしているために、そこで用例の挙げ方の点にある程度の無理を生じているようである。

『日本大文典』では、このあと口語について更に言及されているが、ここでもっと後に述べてある文語に目を向けてみることにする。

書きことばの活用（ロ氏文典157頁）

○直説法の現在

上ぐる
上ぐるなり

○不完全過去

上ぐる
上げける
上げたる

○完全過去及び大過去

上げたる
上げける
上げつる

○未来

上げし
上げき
上げぬ
上げぬる
上ぐべく、べき、べし
上げん、ず、る
上げなん、ず、る
上げたらん、ず、る
上げばや

右の例において、現在・不完全過去・完全過去・大過去・未来の相異は、動詞の終止型そのもの（ここでは「書きことば」と言いながら、既に「上ぐる」というように連体形が終止形の役割を担っている）あるいは、ほかの活用形に助詞・助動詞の加わったものにより表わされている。この前の例である「でござる」の時と同じように、「上ぐる」は直接法現在と不完全過去で重なって挙げられてあるし、「上げける」「上げたる」は不完全過去と完全過去・大過去で重出している。（また完全過去及び大過去では「上げし」と「上げき」、「上げぬ」と「上げぬる」がある意味で重出している。）

日本語の中で、助動詞・助詞により過去・未来が表現されることは以上のロ氏文典の記述からもわかることであるが、助詞・助動詞の点で文語と口語との場合を較べると、文語の表現形の方が随分多様であることが見てとれる。

右のロ氏文典本文に続いて

書きことばに於ける直接法過去及び未来に用ゐられる種々なる助辞について

という項目があり、そこであげられている助辞は「あるものは単一であり、あるものは他の語との複合であり」、またあまりに「明瞭で」あるものは「除き、やや難解な用例をいくらかづつ添える」とある。そこには次の様なものがあげられている。

○過去の助辞は次の通りである。

エリ、エる、にけり、にける、にたり、にたる、にけん、にき、にし、になん、に侍り、ぬ、ぬる、けん、き、けり、ける、たり、たる、たりし、たりけり、たりける、たりけん、たりき、たりつる、つる、つ、つつ、てし、てんげり、てんげる、畢んぬ、し

次に未来を表現するのに使う助動詞・助詞として以下のものがあげられている。(ロ氏文典165頁)

○書きことばの肯定活用直説法

未来に用ゐる助辞

べく、べき、べし。例へば―上ぐべく、べき、べし
アん、エン、イン。例へば―上げん、読まん、見ん
なん。例へば―上げなん、読みなん、習ひなん
ばや。例へば―上げばや、読まばや、習はばや
てん、たらん、ずる、ずらん。し、べかりける、べかりし、
べけんや。即ちべきや。ぬべき、ぬべし、たるべし、つべ
し、つらん、ぬらん、ずらん。こそを伴ったらぬ及びけぬ

以上のように助辞のあげかたに多少の問題はあるとしても多種多様の助辞が列挙してある。(これは種々の文体に使われている助辞を「悉く収めた」ので数が多くなつたのである。)また、そのあとにあるものについては具体的な使用例(例えば、文体による使用例の違いなど)が掲げられている。この如き作業はポルトガル人に日本語を理解学習させるには良いかもしれないが、それはいくらそういつたものを並べ上げて、例えばポルトガル語に於ける時の重層的構成に相当するものが日本語に見つかるといふわけではない。但しこゝでの場合は、時の構成に対応させるというよりも、もっと実用的に宣教師に知識を修得させるための羅列(網羅)及びその具体的な説明であろう。が、ロ氏文典の記述の基本的姿勢は、ポルトガル語の構造に合わせようとするものである。(しかし、これは外国語を最初に学習するとき、どの国の人でもそうするに違ひない方法ではある。)

ではここでポルトガル語動詞の法と時とに関する實際を参照してみよう。(管見では現代ポルトガル語に関する基礎的文献しか参考にできなかった)(大学書林刊「新稿ポルトガル語四週間」星誠氏著。なお、この本の著者、星氏は土井忠生氏がロ氏文典を邦約するにあたって助力を提供した人でもある。)

直説法

(單純時)

(複合時)

現在

不完全過去

複合完全過去

完全過去

複合大過去

單純大過去

完全未來

不完全未來

過去

現在

条件法

現在

命令法

現在

接続法

現在

不定法

不完全過去

不完全未來

完全未來

(分詞)

人稱現在

人稱過去

現在分詞

複合現在分詞

過去分詞

(基本の時)

(第二の時)

完全過去

不完全過去

現在

大過去

未來

条件法

参照した本に「注意」として、「動詞の分類や名称はま

ちまちできまわってない」と書いてあるが、右の表を見る

とロ氏文典の日本語の時制についての記述基準が、ポルトガル語の文法そのものに基づいていることがわかる。これ

はロ氏文典がポルトガル人向けに書かれたものであるから当然すぎるくらいのことであるが、我々日本人はその事に充分留意して、かの文典を読まなければならない。

ロドリゲスはその事を次の様に表現している。(ロ氏文典33頁)

この国語は、直接法・命令法・接続法及び分詞には固有の語形があるけれども、それ以外の法は元来ないのである。その外の法はこれらの法とそれに接続する特定の助辞とによって補はれるからである。(中略)固有の語形の備った法は、三つの時以外には本来ない。即ち現在完全過去及び未來がそれであって、日本人はそれを「過去」「現在」「未來」の三語によって言ひ表す。

ではポルトガル語で言うところの現在・完全過去とはどういうものか。星氏の著書から引用してみよう。

現在 (presente)

(a) 談話の際、現実に行なわれる状態・動作を示す。多少継続的な意味を持つ場合と、一時的な意味を持つ場合とがある。

Sou feliz. 私は幸福だ。

Tu praticas boas ações. 前の行為は立派だ。

(b) 現在の習慣的事実と一般的真理を示す。

Chove todas as tardes. 午後はいつも雨が降る。

Saio sempre depois do jantar.

私はいつも昼食後に外に出る。

- (c) 過去の物語を叙述するに当り文章に活気を与えるために過去の代りに現在を用いることがある。これを歴史的現在と呼ぶことがある。またきわめて近い過去にも用いられる。

No primeiro de dezembro de 1640 reconquistar-se a independência.

一六四〇年十二月一日に再び独立をかちえた。

Falo-lhe ontem.

きのう私は彼に話した。

- (d) 近い未来に行なわれる事柄を示す場合、あるいはまたわれわれの意志によりある定まった時に事が行なわれる場合に、未来の代りに用いられる。

Logo saio; volto daí a uma hora.

すぐ出かけて一時間た。たがもどきります。

Domingo parto para o Brasil.

日曜日にブラジルに立ちます。

- (e) (f) 省略

完全過去 (preterito perfeito)

- (a) 継続の意味なく一時的で全く過去になつてしまつた事実を表わすのに用いられる。

D. Afonso Henriques foi o primeiro rei de Portugal.

ドン・アフォンソ・エンリケスはポルトガル最初の王であつた。

No 1^o de setembro de 1923 houve em Tóquio um grande terremoto.

一九二三年九月一日、東京に大地震があつた。

- (b) ある過去の事実に対して、それよりも少し前に行なわれた同じく過去の他の事実を表わすのに完全過去を用いる。すなわち大過去の代用である。

Logo que saiu o preso, o povo apunhou e quis mata-lo.

囚人が外に出ると国民はかれをのり、かれを殺そうとした。

Uma telha caiu-lhe na cabeça e ele morreu em seguida.

かわらが頭に落ち、かれはまもなく死んだ。

- (c) 完全過去は主として歴史・物語などの連続した事柄、言いかえれば断片的でない事実を示すのに用いられる。だからこれを歴史的過去 (preterito histórico) とも言う。

O homem, quando acordou, ficou muito admirado por não ver os seus chapéus.

その男は目をさました時に帽子が見えないので非常に驚いた。

Olhou para um lado, olhou para o outro-nem sinal.

あちらを見たり、こちらを見たりしたが、影も形もなかった。

(d)、(e)省略

未来には不完全未来と完全未来とがあるが、こゝでは詳述しない。

ロドリゲスは、以上のポルトガル語の用法が日本人の言う「過去」「現在」「未来」にあたと述べているわけである。その内容を検討してみると、確かに両者の対応はなりたっている様に思われる。

しかしロドリゲスはこの文典の記述に際してポルトガル語での「現在」「完全過去」「未来」の三つのみで日本語の分類をしているわけではない。別の言い方をすれば日本語の時制は過去・現在・未来しかないことを知りながら、できるだけポルトガル語の文法に合わせようとしている。

例えばこの論文の最初に例として出した存在動詞「ござる」の記述法であるが大筋を示すと次の様である。

直接法—現在(単・複)、不完全過去、完全過去、大過去、未来、完全未来又は確実未来

命令法—現在、未来又は委託法

希求法—現在及び不完全過去、完全過去、未来

接続法—現在、不完全過去、完全過去、大過去、未来
右の如き法と時の分類がロ氏文典の記述の基本になっていて、文例としてあげられている日本語もできるだけそろしいものが用例となっている。

さて、今まで16世紀日本の主に書き言葉の時に関する記述を見てきたが、ここで当時の話し言葉の時についての記述を見ていくことにしよう。

直接法の時に就いて(ロ氏文典45頁)
最初に現在に就いて

ここでまず最初に「直接法の現在の形は特定の助辞を伴って違つた時にも代用されるので色々な用法がある。」とあり、日本語でいうところの基本的な現在を表わす形がいろいろそのほかの意味をも表わすとしている。それは例えば次の場合に使われる。

不完全過去

接続法

不定法

動詞状名詞

目的分詞

現在分詞

とあるが、後の方でされている各々についての説明を見ると、これもほとんどポルトガル語内での文法的相違であ

って日本語の中では「現在」の中の問題として充分解決できる問題である。

(中略)

○完全過去及び大過去に就いて

。「た」「だ」に終る過去の形は普通に話し言葉で使ひ、それで文を終る。

。「たる」「だる」「つる」も過去を表わし普通にはその後の名詞等が続く。

。「たり」「だり」「つ」「づ」も過去を表わすが、何時も他の句が続く。(筆者注)この場合、用例が幸若舞からとってきてあり、さほど口語的とは言ひ難い。)

腕の力は覚えつ、薙刀の金は良し。

—八島の舞—

精兵の大矢にて肝の束ねを通されつ、何かは以て怵

ふべき。

— 同 —

。「たり」「だり」に終る過去の形は、また別の意味を持って居り、それは甚だ上品な言ひ方である。

第一の意味は「よくやった」との意味が込められている。

先づは射たり射たりとどっと笑うた。

—高館—

第二の意味は二つ或いはそれ以上の行為を並行して、

或いは続けて行なう状態をさす。

一所に集って打ったり、舞うたり、高声に上もなげ

にどめいて酒を呑む。

—山中の舞—

。「つ」「づ」に終る過去の形も「たり」「だり」に終る過去の第二の意味である。

上げつ、読うづ、習うづ、囃いつ乱舞をせらるる

—八島—

(中略)

。往々過去を現在に使う動詞がある。

知る、知った

存ずる、存じた

私は知っている

。「らう」に終る一つの形がある。本来、可能法に属するもの。

上げつらう、読うづらう、習うつらう

以上で直接法の過去についての記述は概ね尽したわけであるが、口語的なもの、口語の中でもある条件のもとでしか使われないもの、かなり文語的と言えるもの、と並行して紹介してあった。しかし、文語的なものはあとで「書き言葉」の項であげられる。とあるので、ここであげてあるのは全体としては口語的な感じのするものなのであろう。

では未来に関してはどのような記述がされているのだろうか。

話し言葉だけに使われる未来の三つの基本の形として、

上げう

上げうず
上げうずる

が掲載されている。更に続けていわゆる「関東べい」の紹介があり、かの地ではよく使われる旨の記述がある。

例―上げべい、読むべい、習ふべい

次の未来形の一つとして

上げたらう、ず、る（↑本来上げてあらうず）

これで文を終止せず、名詞に続く。

例―この松を真直に見たらう人に褒美をせうず。

―会下物語―

次に「ばや」に終る形をあげている。

上げばや

読まばや

名字を聞かばやとて、名字を名乗れといふ。

このあとさらに「未来形『上げう、ず、る』の種々な用法に就いて」「未来のある言ひ方について」「助辞『に』を伴ふ未来」等々が述べられているが、それらはまさにポルトガル語の法に基づいた分類と密接に関わり、ここではあえて掲げなかった。

ここで引用した「未来」の文例について言うとき確かにその文の内容は今という時点よりも先に実現するもののだが、我々日本人（こゝでは現代日本人とする必要がある）の感覚から言うと、現在と未来というものが切り離されてあるというよりも、現在という時点に足をしっかりと置いて、そこから、先の時点のことをいろいろと考えている、

と見た方が自然であり、それを一つの呼び方として「未来」と呼ぶことは可能かもしれないが、本当のところは日本語の中ではあまりなじまない表現である。

これは程度の差こそあれ、文語・口語（当時の）ともに言えることである。

つまり、日本語に西歐語的な時制という考えを導入することの可否が問題になるのだ。

深く掘り下げた議論は行なえなかったが、この少論に述べたいいくつかの事柄によっても、日本語とポルトガル語における時制に対するとり組み方が全く違ってよい程、異っている。（部分的な現象としては似たところはあっても）ことに読者は気づかれたことと思われる。そういった意味でロドリゲスはこの部分（に限らないだろうが）の記述をする時に苦労したことであろうと推測される。